

青梅市の谷津田跡地を産卵場とするトウキョウサンショウウオ個体群の衰退

久保田繁男（西多摩自然フォーラム）

丘陵の谷間の耕作放棄された谷津田跡地は、1960年代以降トウキョウサンショウウオに良好な産卵・成育の環境を提供してきた。谷津に新田開発が進む以前に、トウキョウサンショウウオの生息状況がどうだったかは定かでない。

1960~70年代にかけて水田が減少し、とりわけ生産性が低い谷津田は真っ先に耕作放棄されて、この水田跡地の湿地環境はトウキョウサンショウウオに格好の産卵・成育環境をもたらしたかと思われる。この時代の生息状況が金井郁夫氏による1978年調査の報告であり、この余韻を残したのがトウキョウサンショウウオ研究会による1998年調査だったと思う。

谷津田跡地の産卵場では、その後卵嚢数が減少傾向にある。谷津田跡地に限定した1998年、2008年、2018年の調査での卵嚢数の推移は以下のとおりである。

谷津田跡地の卵嚢数の推移

草花丘陵		1998年	2008年	2018年	備考
	産卵場所				
O-3	旧水田面の水溜り	4	0	0	
O-6-4	水路の中の水溜り	—	14	0	2001年75
O-7	水路の中の水溜り	4	12	0	
O-8	旧水田面の水溜り	110	10	—	
O-9	水路の中の水溜り	40	14	—	
O-10	旧水田面の水溜り	140	82	10	
2006年10房→この年から浚渫整備開始→2009年からアライグマ対策のシエルター設置→2014年166房→2016年から激減（アライグマ?）					
O-※1	水路の中の水溜り	8	6	0	
O-15	水路の中の水溜り	98	44	0	
O-16	水路の中の水溜り	91	53	0	
O-19	旧水田面の水溜り	65	13	0	1994年157
加治丘陵（小曾木地区）		1998年	2008年	2018年	備考
	産卵場所				
N-7	旧水田面の水溜り	45	※	0	※幼生20
N-13	水路の中の水溜り	15	2	0	

谷津田跡地を産卵・成育の場してきたトウキョウサンショウウオの衰退は著しい。個体群の絶滅に至った生息地も多い。絶滅に至る推移は、以下の経過を辿って生じたと推定する。

- ① 耕作放棄後の旧水田面の水溜りに産卵→幼生はこの水溜り内で成長→上陸して幼体へ。
- ② 畦畔の決壊により旧水田面内に水路が出来、更にこの水路の洗掘が進行。また、旧水田脇の水路も洗掘が進行。この結果、旧水田面は乾燥化が進み、産卵環境が喪失。
- ③ 産卵場所が、旧水田面内または旧水田脇の水路の水溜りに移行。
- ④ 孵化した水路内の幼生は、増水時に流出して後継世代が育たない（久保田の推定）。トウキョウサンショウウオの幼生は尾ビレが幅広く止水性の体型なので、流水域での生存が難しいのではないかと推定される。
- ⑤ 親世代の死亡（自然死またはアライグマによる捕食）に伴い個体群の縮小が進み、最終的に絶滅に至る。

アライグマの影響

トウキョウサンショウウオ個体群の衰退には、アライグマによる捕食（成体の食いちぎりや卵嚢の捕食）の影響も大きいと考えられる。

但し、毎年調査している草花丘陵の長淵地区でアライグマによる捕食と推定される死骸が確認されたのは、2005年の4か所5個体が最初である。以降も2008年7個体、2012年3個体が確認されている。上記の表に掲載した産卵場所では、O-15で2005年1個体、2012年1個体、O-9で2008年3個体である。

谷津田跡地の乾燥化による産卵場の環境悪化は、1998年には既に始まっているので、当地における衰退の主たる要因は谷津田跡地の乾燥化による産卵・成育環境の悪化であり、アライグマによる捕食が親世代の個体数を減少させ、衰退の流れに拍車をかける役割になっていると考えられる。

なお、水路内の水溜りの産卵場におけるアライグマの影響は判断が難しい。流水域では死骸が流されてしまいアライグマによる捕食の痕跡が残りづらいこと、増水時には卵嚢も流されるので産卵場と卵嚢確認地点が必ずしも一致しないためである。水路内の水溜りにある卵嚢は水路に沿って点在していて、アライグマに食い尽くされるとは考えづらい。とすれば、水路という流水域では上陸して幼体にまで辿りつけないと考える方が妥当ではないだろうか。

生息地の保全に向けて

放棄された谷津田跡地の生息地は、放置すれば小流域個体群は絶滅に向かう。何とかしようとするれば、以下の人為的対策が必要不可欠であろう。

- ① 決壊した畦畔の修復と、浚渫による水溜りの創出。
- ② アライグマによる捕食被害を防げる構造のシェルター設置等。